

令和5年度病害虫発生予察特殊報第1号

令和5年6月23日
静岡県病害虫防除所長

- 1 病害虫名 和名：クロテンコナカイガラムシ
学名：*Phenacoccus solenopsis* Tinsley
- 2 発生物種 トマト、きゅうり、オクラ、ズッキーニ
- 3 発生経過
 - (1) 令和5年5月中旬、静岡県西部地域の施設栽培のトマト及び中部地域の同一施設で栽培されているきゅうり、オクラ、ズッキーニにおいて、コナカイガラムシ類が各作物の株に寄生、増殖していることが確認された（写真1、2-abc）。
 - (2) トマトで採集された個体を、農林水産省名古屋植物防疫所清水支所に同定依頼した結果、クロテンコナカイガラムシ(*Phenacoccus solenopsis* Tinsley) と同定された。
また、オクラで採集された個体についても同所に同定依頼した結果、クロテンコナカイガラムシと同定された。
- 4 特徴
 - (1) 分布
本種は中南米原産で、東南アジアやアフリカをはじめ世界各地に分布域を拡大している。国内では、平成21年に沖縄県で初めて発生が確認された後、愛知県や岐阜県など西日本の18府県で発生が確認されている。
 - (2) 加害植物
広食性であり、64科200種以上の植物に寄生することが知られている。国内では、トマト、なす、ピーマン等のナス科植物のほか、きゅうり、ほうれんそう、きく等でも被害が報告されている。
 - (3) 形態及び生態
雌成虫は、楕円形で体長約3～5mm。背面に白色のロウ物質を分泌し、体色は白く見える。ロウ物質の一部が薄くなるため、2齢幼虫以降では背面の前方と後方にそれぞれ1対の黒斑があるように見える（写真3）。雄成虫は1対の翅をもつ。雌成虫は平均350個程度産卵し、交尾後に産卵する有性生殖と、交尾せず産卵する無性生殖の両方が知られる。
幼虫は、1齢幼虫期には歩いて分散する。雌は3齢幼虫を経て成虫となるが、雄は2齢幼虫を経て蛹となり、羽化して成虫となる。年間に数世代を繰り返す。
 - (4) 被害
植物の茎、葉、花芽及び果実に寄生し、吸汁による排泄物として甘露を分泌するため、葉や果実にすす症状を引き起こす。吸汁により寄主植物を衰弱させるため、葉の萎縮や多発すると生育不良を引き起こす。
- 5 防除対策
 - (1) 現在、トマト、きゅうり、オクラ、ズッキーニにおいて本種に対する登録農薬はない。
 - (2) ほ場内をよく観察して早期発見に努め、発生を確認した場合は、拡大を防ぐため寄生部位をすみやかに除去する。除去後は、ほ場外に持ち出し土中に埋めるか、ビニール袋に密閉して処分するなど適切に処理する。
 - (3) 雑草に寄生して生息可能であるため、施設内外の除草を徹底する。

【参考資料】



写真1 トマトの茎に寄生した成幼虫



写真2-a きゅうり葉に寄生した成幼虫と葉の萎縮症状(左)及び果実へ寄生する成虫(右)



写真2-b オクラの茎に寄生した成虫



写真2-c ズッキーニの葉に寄生した成幼虫

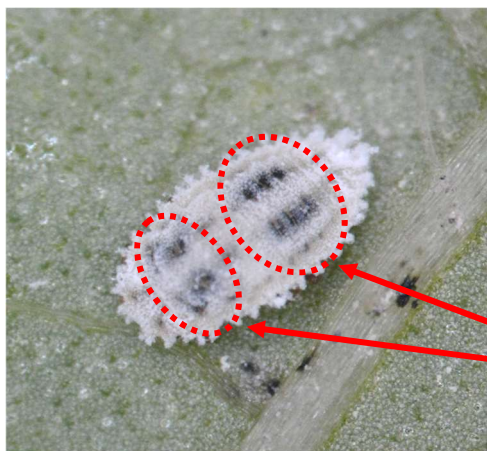


写真3 雌成虫

背面の前方と後方に
各1対の明瞭な
黒斑が見られる